

2. 騒音・振動

(1) 施設関連車両の走行に伴う騒音

① 騒音レベル、交通量

1) 調査地点

調査地点は、施設関連車両の走行ルートである図 3-12 に示す 5 地点とした。

2) 調査日

調査日は、表 3-50 に示すとおりであり、稼働後施設定常稼働時における施設関連車両の通常走行時に 1 回実施した。

表 3-50 調査日

調査項目		調査日
道路交通騒音	騒音レベル	令和 6 年 10 月 15 日（火） 6:00 ～ 10 月 16 日（水） 6:00
交通量		

3) 調査方法

調査方法は、表 3-51 に示すとおりである。

表 3-51 調査方法

調査項目		調査方法
道路交通騒音	騒音レベル	「騒音に係る環境基準について」（平成 10 年環境庁告示第 64 号）に定める方法
交通量		目視観測等による方法

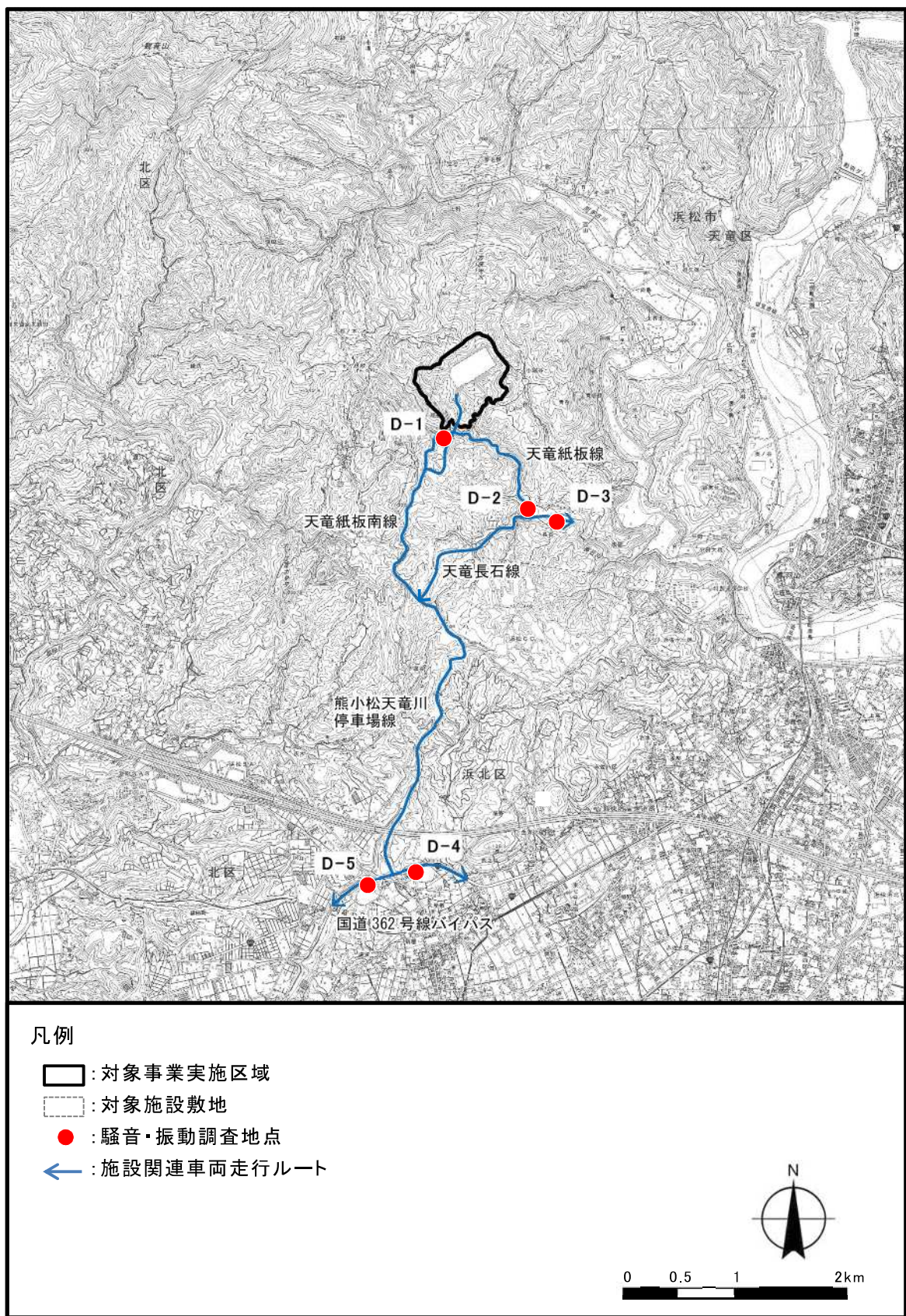


図 3-12 調査地点

4) 調査結果及び予測結果との比較

ア) 調査結果

i) 騒音

調査結果は、表 3-52 に示すとおりであり、各地点で環境基準値以下であった。

表 3-52 騒音調査結果

単位：dB

調査地点	時間帯	道路交通騒音 (L_{Aeq})	環境基準 (L_{Aeq})	環境基準と の適合状況 適：○ 否：×
D-1	昼間	49	(65)	○
	夜間	50	(60)	○
D-2	昼間	49	(65)	○
	夜間	46	(60)	○
D-3	昼間	61	(65)	○
	夜間	53	(60)	○
D-4	昼間	64	70	○
	夜間	55	65	○
D-5	昼間	65	70	○
	夜間	56	65	○

注 1) D-1～D-3 地点は、環境基準の類型指定外の地域である。参考値として最も近い区域にある B 類型の道路に面する地域の基準値を（ ）示した。

注 2) D-4、D-5 地点の環境基準値は、幹線道路を担う道路に近接する空間（特例）の値である。

注 3) 時間の区分は、昼間：6:00～22:00、夜間：22:00～6:00 を示す。

ii) 交通量

調査結果は、表 3-53 に示すとおりである。

なお、交通量が多い D-4 及び D-5 地点は、幹線道路である国道 362 号バイパスに位置する。

表 3-53 交通量調査結果

地点	断面交通量（台）					
	施設関連 車両 (大型車)	大型車	小型車	二輪車	自動車 類計	大 型 混入率
D-1	1	0	57	3	58	2%
D-2	0	3	22	2	25	12%
D-3	130	162	726	45	1,018	29%
D-4	171	1,266	7,707	167	9,144	16%
D-5	201	1,703	10,145	220	12,049	16%

注) 交通量の調査結果は、6:00～翌 6:00 の 24 時間交通量を示す。

イ) 予測結果との比較

環境影響評価書における予測結果と事後調査結果について比較を行った。

比較結果は、表 3-54 に示すとおりである。

表 3-54 予測結果との比較

予測項目	事後調査結果	予測結果
騒音レベル	施設関連車両の走行に伴う道路交通騒音（L_{Aeq}）の調査結果（昼間）は以下のとおり、環境基準値及び予測結果（D-4及びD-5を除く）以下であった。 なお、調査結果が予測値よりもわずかに高い地点があったが、調査地点は国道362号バイパス沿道に位置し、評価書以降に道路が整備され、交通状況が変化したことによる影響と考えられる。 D-1 : 49dB D-2 : 49dB D-3 : 61dB D-4 : 64dB D-5 : 65dB	施設関連車両の走行に伴う道路交通騒音（L_{Aeq}）の予測結果（昼間）は以下のとおり、環境基準値以下と予測される。 D-1 : 57.7dB D-2 : 56.9dB D-3 : 61.5dB D-4 : 62.6dB D-5 : 63.9dB

(2) 施設関連車両の走行に伴う振動

① 振動レベル、交通量

1) 調査地点

調査地点は、施設関連車両の走行ルートである前掲図 3-12 に示す 5 地点とした。

2) 調査日

調査日は、表 3-55 に示すとおりであり、稼働後施設定常稼働時における施設関連車両の通常走行時に 1 回実施した。

表 3-55 調査日

調査項目		調査日
道路交通振動	振動レベル	令和 6 年 10 月 15 日（火）6:00 ～ 10 月 16 日（水）6:00
交通量		

3) 調査方法

調査方法は、表 3-56 に示すとおりである。

表 3-56 調査方法

調査項目		調査方法
道路交通振動	振動レベル	「振動規制法施行規則」（昭和 51 年総理府令第 58 号）に定める方法
交通量		目視観測等による方法

4) 調査結果及び予測結果との比較

ア) 調査結果

i) 振動

調査結果は、表 3-57 に示すとおりであり、各地点で要請限度以下であった。

表 3-57 振動調査結果

単位：dB

調査地点	時間帯	道路交通振動 (L_{10})	要請限度 (L_{10})	要請限度と の適合状況 適：○ 否：×
D-1	昼間	<25	65	○
	夜間	<25	60	○
D-2	昼間	<25	65	○
	夜間	<25	60	○
D-3	昼間	<25	65	○
	夜間	<25	60	○
D-4	昼間	31	65	○
	夜間	<25	60	○
D-5	昼間	32	65	○
	夜間	<25	60	○

注 1) 表中の「<25」は、振動レベル計の測定下限値（25dB）未満を示す。

注 2) 時間の区分は、昼間：8:00～20:00、夜間：20:00～8:00

注 3) 要請限度は、第 1 種区域の値である。

ii) 交通量

調査結果は、「2. 騒音・振動」に示すとおりである。

イ) 予測結果との比較

環境影響評価書における予測結果と事後調査結果について比較を行った。

比較結果は、表 3-58 に示すとおりである。

表 3-58 予測結果との比較

予測項目	事後調査結果	予測結果
振動レベル	施設関連車両の走行に伴う道路交通振動（L_{10}）の調査結果は以下のとおり、要請限度値及び予測結果（D-4昼間を除く）以下であった。 なお、調査結果が予測値よりも高い地点があったが、調査地点は国道362号バイパス沿道に位置し、評価書以降に道路が整備され、交通状況が変化したことによる影響と考えられる。 D-1：25dB未満（昼間・夜間） D-2：25dB未満（昼間・夜間） D-3：25dB未満（昼間・夜間） D-4：31dB（昼間）、25dB未満（夜間） D-5：32dB（昼間）、25dB未満（夜間）	施設関連車両の走行に伴う道路交通振動（L_{10}）は、以下に示すとおりであり、要請限度の基準値以下と予測される。 D-1：19.7dB（昼間）、9.8dB（夜間） D-2：14.1dB（昼間）、12.1dB（夜間） D-3：33.8dB（昼間）、26.0dB（夜間） D-4：25.8dB（昼間）、25.1dB（夜間） D-5：36.8dB（昼間）、18.5dB（夜間）

3. 水質

(1) 排水に伴う水の汚れ

① 水素イオン濃度（pH）、溶存酸素量（D0）、生物化学的酸素要求量（BOD）、水温

1) 調査地点

調査地点は、図 3-13 に示す対象事業実施区域内における調整池堰堤の下流側 2 地点（S-1、S-2）と区域内直下の沢 1 地点（S-3）及び長石川上流 2 地点（S-4、S-5）の計 5 地点とした。

2) 調査日

調査日は、表 3-59 に示すとおりであり、稼働後施設定常稼働時に 2 回実施した。

表 3-59 調査日

調査項目	調査日	
	夏季	冬季
水素イオン濃度（pH）、 溶存酸素量（D0）、 生物化学的酸素要求量（BOD）、 水温	令和 6 年 8 月 9 日	令和 7 年 2 月 18 日

3) 調査方法

調査方法は、表 3-60 に示すとおりとした。

表 3-60 調査方法

調査項目	調査方法
水素イオン濃度（pH）、 溶存酸素量（D0）、 生物化学的酸素要求量（BOD）、 水温	「水質汚濁に係る環境基準について」（昭和 46 年 環境庁告示第 59 号）に定める方法

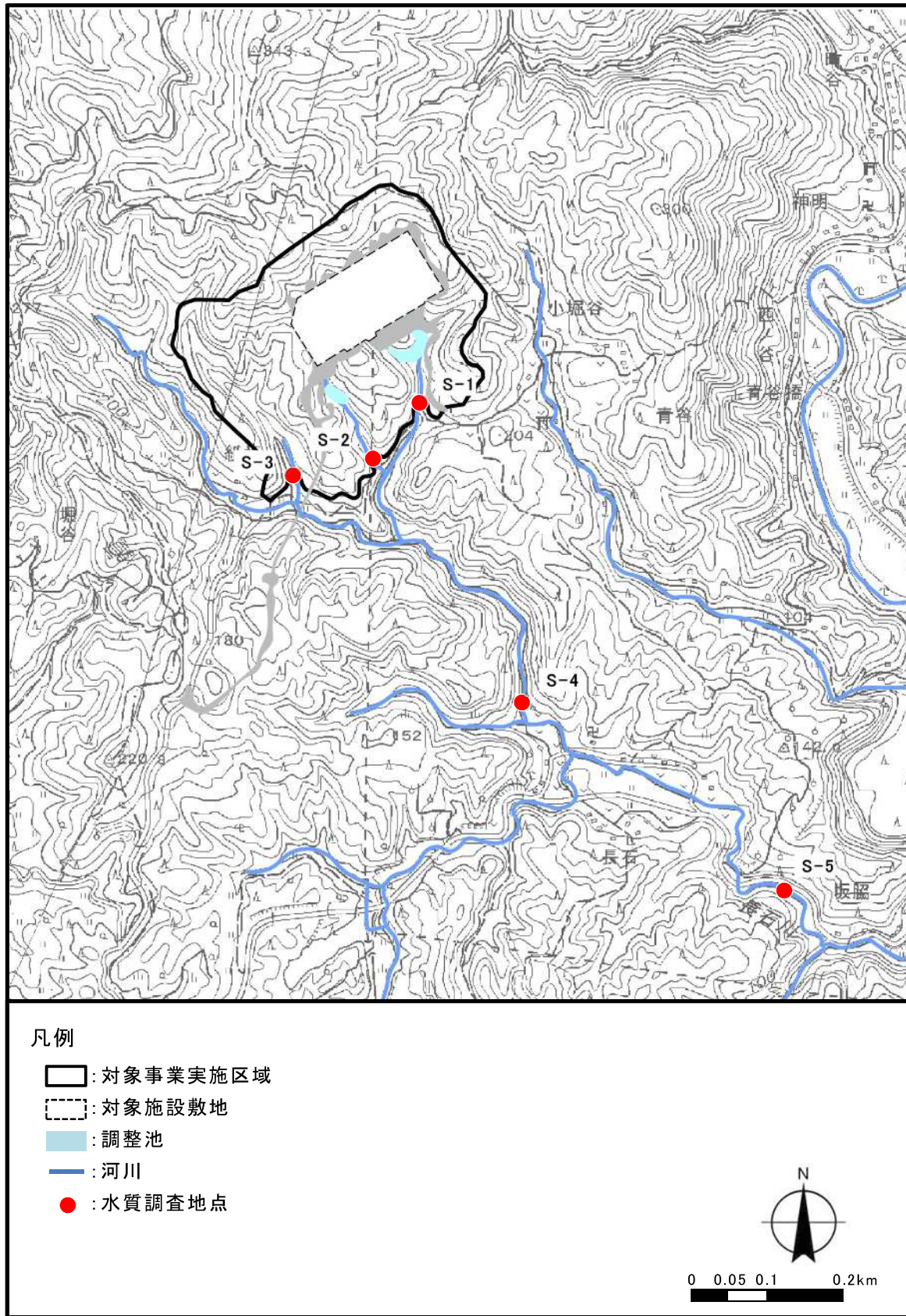


図 3-13 調査地点

4) 調査結果及び予測結果との比較

ア) 調査結果

調査結果は、表 3-61 に示すとおりであり、対象事業実施区域周辺河川の天竜川上流及び下流の環境基準（AA 類型）と比較すると、全地点で環境基準値を満足する結果であった。

表 3-61 水質調査結果

調査 時期	調査地点	調査結果			
		水素イオン濃 度 (pH) —	溶存酸素量 (DO) mg/L	生物化学的酸素 要求量 (BOD) mg/L	水温 ℃
夏季	S-1	8.2	7.7	0.5 未満	28.5
	S-2	8.1	8.1	0.5 未満	25.8
	S-3	8.1	8.6	0.5 未満	24.7
	S-4	8.2	8.2	0.5 未満	24.5
	S-5	8.1	8.1	0.5 未満	26.7
冬季	S-1	8.0	12.1	0.5 未満	6.5
	S-2	7.8	10.6	0.5 未満	10.9
	S-3	7.9	12.2	0.5 未満	8.0
	S-4	8.0	12.3	0.5 未満	6.1
	S-5	7.9	12.1	0.6	6.2
環境基準(AA 類型)		6.5 以上 8.5 以下	7.5mg/L 以上	1mg/L 以下	—

イ) 予測結果との比較

環境影響評価書における予測結果と事後調査結果について比較を行った。

比較結果は、表 3-62 に示すとおりである。

表 3-62 予測結果との比較

予測項目		事後調査結果	予測結果
排水水に伴う水の汚染	水素イオン濃度 (pH)、溶存酸素量 (DO)、生物化学的酸素要求量 (BOD)、水温	施設稼働に伴う排水水はクローズドシステムの導入により、対象事業実施区域外へ放流していない。 施設稼働の排水水に伴う水の汚染の調査結果は全地点で環境基準値を満足する結果であった。 予測結果のとおり周辺環境への影響は生じていないものと考えられる。	排水水は対象事業実施区域外へ放流しない。 雨水は一度調整池に放流した後に、長石川へ排水するため周辺環境への影響は生じないと予測される。

(2) 排水に伴う水の濁り

① 浮遊物質量 (SS)

1) 調査地点

調査地点は、排水に伴う水の汚れと同様の前掲図 3-13 に示す 5 地点とした。

2) 調査日

調査日は、表 3-63 に示すとおりであり、稼働後施設定常稼働時(降雨中)に 2 回実施した。

表 3-63 調査日

調査項目	調査日	
	1 回目	2 回目
浮遊物質量 (SS)	令和 6 年 10 月 3 日～ 令和 6 年 10 月 4 日	令和 6 年 11 月 2 日～ 令和 6 年 11 月 3 日

3) 調査方法

調査方法は、表 3-64 に示すとおりとした。

表 3-64 調査方法

調査項目	調査方法
浮遊物質量 (SS)	「水質汚濁に係る環境基準について」(昭和 46 年環境庁告示第 59 号)に定める方法

4) 調査結果及び予測結果との比較

ア) 調査結果

調査結果は表 3-65 に示すとおりである。

1 回目調査では、降水量がピークとなった 18 時台に S-2 (30mg/L) と S-3 (100mg/L) が最大となり、21 時台に S-1 (29mg/L)、S-4 (97mg/L) 及び S-5 (110mg/L) が最大を示したが、12 時間後の翌 9 時台には、全地点ともに浮遊物質 (SS) が 3~7mg/L と平常時程度になることが確認された。

2 回目調査では、降水量がピークとなった 17 時台に、S-1 (42mg/L)、S-2 (68mg/L)、S-3 (96mg/L)、S-4 (130mg/L) 及び S-5 (120mg/L) とともに最大を示したが、12 時間後の翌 5 時台には、全地点ともに SS が 2~8mg/L と平常時程度になることが確認された。

1 回目及び 2 回目調査ともに調整池のない S-3~S-5 における最大の SS は 96~130mg/L と増加したが、調整池を設置した S-1 及び S-2 は 29~68mg/L であったことから、調整池の効果により、降雨時による一時的な濁水の発生が抑制されていることが確認された。

また、降雨時においては、参考基準を一時的に超過しているが、建設前の現地調査（環境影響評価書時）においても降雨時に SS が一時的に超過し、その後、時間経過とともに SS が減少する傾向が確認されている。本調査においても同様の傾向が確認されており、特に調整池のある S-1 及び S-2 においては、表 3-66 に示すとおり、建設前と比較して降雨時の濁水 (SS) が大幅に抑えられていることから、施設稼働に伴う影響はないものと考えられる。

表 3-65 (1) 水質調査結果（事後調査：1 回目）

調査日	時刻	降水量 (mm)	浮遊物質 (SS) (mg/L)					参考基準
			S-1	S-2	S-3	S-4	S-5	
令和 6 年 10 月 3 日	17 時	6.0	—	—	—	—	—	環境基準 AA 類型 25mg/L
	18 時	12.5	23	30	100	28	44	
	19 時	3.0	—	—	—	—	—	
	20 時	0.0	—	—	—	—	—	
	21 時	9.5	29	17	15	97	110	
	22 時	0.5	—	—	—	—	—	
	23 時	1.0	—	—	—	—	—	
	24 時	0.0	10	9	5	9	16	
令和 6 年 10 月 4 日	1 時	0.5	—	—	—	—	—	
	2 時	0.5	—	—	—	—	—	
	3 時	1.0	29	6	6	7	8	
	4 時	5.0	—	—	—	—	—	
	5 時	1.0	—	—	—	—	—	
	6 時	0.5	—	—	—	—	—	
	7 時	0.0	—	—	—	—	—	
	8 時	0.0	—	—	—	—	—	
	9 時	0.0	7	3	3	7	6	

注 1) 降水量は「気象統計情報」（気象庁 HP）天竜地域気象観測所の観測結果を示す。

注 2) 参考基準は対象事業実施区域周辺河川の天竜川上流及び下流の環境基準（AA 類型）を示す。

なお、水質の環境基準は、水質が安定した平常時を対象としているため、降雨時の調査においては参考とした。

注 3) 表中の網掛けは最大を示す。

表 3-65(2) 水質調査結果（事後調査：2 回目）

調査日	時刻	降水量 (mm)	浮遊物質量 (SS) (mg/L)					参考基準
			S-1	S-2	S-3	S-4	S-5	
令和 6 年 11 月 2 日	15 時	3.5	37	13	11	9	5	環境基準 AA 類型 25mg/L
	16 時	5.5	—	—	—	—	—	
	17 時	26.5	42	68	96	130	120	
	18 時	3.5	—	—	—	—	—	
	19 時	0.0	—	—	—	—	—	
	20 時	0.0	—	—	—	—	—	
	21 時	0.0	12	22	6	11	20	
	22 時	0.0	—	—	—	—	—	
	23 時	0.5	—	—	—	—	—	
令和 6 年 11 月 3 日	24 時	0.0	—	—	—	—	—	
	1 時	0.0	—	—	—	—	—	環境基準 AA 類型 25mg/L
	2 時	0.0	6	5	2	7	8	
	3 時	0.0	—	—	—	—	—	
	4 時	0.0	—	—	—	—	—	
	5 時	0.0	4	3	2	3	8	

注 1) 降水量は「気象統計情報」（気象庁 HP）天竜地域気象観測所の観測結果を示す。

注 2) 参考基準は対象事業実施区域周辺河川の天竜川上流及び下流の環境基準（AA 類型）を示す。

なお、水質の環境基準は、水質が安定した平常時を対象としているため、降雨時の調査においては参考とした。

注 3) 表中の網掛けは最大を示す。

表 3-66 調整池設置による濁水対策の効果

項 目	S-1		S-2		参考基準
	建設前 調整池なし	建設後 調整池あり	建設前 調整池なし	建設後 調整池あり	
降水量のピーク時 最大浮遊物質量 (SS) (mg/L)	200～280	29～42	150～160	30～68	環境基準 AA 類型 25mg/L
【1 時間降水量のピーク時】 環境影響評価時 建設前：1 回目 平成 28 年 6 月 21 日 9 時 降水量 16.5mm 2 回目 平成 28 年 9 月 20 日 17 時 降水量 20.5mm 事後調査時 建設後：1 回目 令和 6 年 10 月 3 日 18 時 降水量 12.5mm 2 回目 令和 6 年 11 月 2 日 17 時 降水量 26.5mm					

注 1) 降水量は「気象統計情報」（気象庁 HP）天竜地域気象観測所の観測結果を示す。

注 2) 参考基準は対象事業実施区域周辺河川の天竜川上流及び下流の環境基準（AA 類型）を示す。

なお、水質の環境基準は、水質が安定した平常時を対象としているため、降雨時の調査においては参考とした。

イ) 予測結果との比較

環境影響評価書における予測結果と事後調査結果について比較を行った。

比較結果は、表 3-67 に示すとおりである。

表 3-67 予測結果との比較

予測項目		事後調査結果	予測結果
排水水に伴う水の濁り	浮遊物質質量 (SS)	施設稼働に伴う排水水はクロードシステムの導入により、対象事業実施区域外へ放流していない。 降雨時における浮遊物質質量の最大値は、調整池のある地点で29～68mg/L、調整池のない地点で96～130mg/Lであった。その後、調整池のある地点では緩やかな減少が確認され、12時間後には全地点ともに浮遊物質質量が2～8mg/Lと平常時程度に減少することが確認された。 また、調整池のあるS-1及びS-2においては、表 3-66に示すとおり、建設前と比較して降雨時の濁水 (SS) が大幅に抑えられていることが確認された。 予測結果のとおり、雨水による濁りは調整池で緩和されることが確認され、12時間程度で平常時に収束することから、周辺環境への影響は生じていないものと考えられる。	排水水は対象事業実施区域外へ放流しない。 雨水は一度調整池に放流した後に、長石川へ排水するため周辺環境への影響は生じないと予測される。

4. 動物

(1) 注目すべき種の生息状況（湧水湿地）

① アズマヒキガエルの産卵状況

1) 調査地点

調査地点は、湧水湿地（貧養地小型植物群落）とした。

2) 調査日

調査日は、表 3-68 に示すとおりであり、アズマヒキガエルの産卵時期の 3 月に 3 回実施した。

表 3-68 調査日

調査項目	調査時期	
	アズマヒキガエルの産卵時期	
注目すべき種の生息状況 （アズマヒキガエルの産卵状況）	令和 7 年繁殖期	令和 7 年 3 月 14 日
		令和 7 年 3 月 17 日
		令和 7 年 3 月 18 日

3) 調査方法

調査方法は、表 3-69 に示すとおりである。

表 3-69 調査方法

調査項目	調査方法
注目すべき種の生息状況 （アズマヒキガエルの産卵状況）	・任意踏査等による方法 ・アズマヒキガエルの産卵状況（卵塊・幼生）を確認し、卵塊数・個体数等を記録した。

4) 調査結果及び予測結果との比較

ア) 調査結果

i) 注目すべき種の生息状況

調査結果は、表 3-70 に示すとおりである。

令和 7 年の繁殖期は、3 月に沢周辺の水溜まり 2 箇所でアズマヒキガエルの卵塊が計 30 個確認された。

表 3-70 注目すべき種の調査結果

調査日		アズマヒキガエルの産卵状況
令和7年繁殖期	令和7年3月14日	確認なし
	令和7年3月17日	確認なし
	令和7年3月18日	沢周辺の水溜まり2箇所でアズマヒキガエルの卵塊が計30個確認された。

ii) 注目すべき種の経年の生息状況

過年度調査から継続して、アズマヒキガエルの産卵が確認された。

イ) 予測結果との比較

環境影響評価書における予測結果と事後調査結果について比較を行った。

比較結果は、表 3-71 に示すとおりである。

表 3-71 予測結果との比較

予測項目	事後調査結果	予測結果
アズマヒキガエルの産卵状況	湧水湿地周辺において、アズマヒキガエルの産卵が継続的に確認されており、湧水湿地にも水環境が維持されていることから、アズマヒキガエルの産卵環境は保全されていると考えられる。	繁殖場所の一部は、水環境の変化の状況等により、生息環境が変化する可能性がある。

(2) アズマヒキガエル（創出した湿地環境）

① アズマヒキガエルの生息状況

1) 調査地点

調査地点は、図 3-14 に示す調整池周辺に創出した湿地環境（両生類の産卵環境）とした。

2) 調査日

調査日は、表 3-72 に示すとおりであり、アズマヒキガエルの産卵時期の 2～3 月に 3 回実施した。

表 3-72 調査日

調査項目	調査時期	
	アズマヒキガエルの産卵時期	
アズマヒキガエルの生息状況	令和 7 年繁殖期	令和 7 年 2 月 26 日
		令和 7 年 3 月 11 日
		令和 7 年 3 月 18 日

3) 調査方法

調査方法は、表 3-73 に示すとおりである。

表 3-73 調査方法

調査項目	調査方法
アズマヒキガエルの生息状況	・ 任意踏査等による方法 ・ 調整池周辺に創出した湿地環境を目視で確認し、アズマヒキガエルの生息及び産卵状況（卵塊・幼生・幼体）を記録した。



図 3-14 調査地点

4) 調査結果及び予測結果との比較

ア) 調査結果

調査結果は、表 3-74 に示すとおりである。

調整池内に創出した湿地環境（両生類の産卵池）において、令和7年2月26日はアズマヒキガエルの成体及び卵塊は確認されなかった。3月11日は成体が20匹確認され、交尾行動も観察された。3月18日は卵塊が計40個確認された。

表 3-74 アズマヒキガエルの調査結果

調査日		アズマヒキガエルの生息状況
令和7年繁殖期	令和7年2月26日	アズマヒキガエルの成体及び卵塊は確認されなかった。
	令和7年3月11日	アズマヒキガエルの成体が20匹確認され、交尾行動も観察されたが、卵塊は確認されなかった。
	令和7年3月18日	アズマヒキガエルの卵塊が40個確認された。

ア) 予測結果との比較

環境影響評価書における予測結果と事後調査結果について比較を行った。

比較結果は、表 3-75 に示すとおりである。

表 3-75 予測結果との比較

予測項目	事後調査結果	予測結果
アズマヒキガエルの生息状況	調整池内に創出した湿地環境において、アズマヒキガエルの成体及び産卵が継続的に確認されており、アズマヒキガエルの生息及び産卵環境は保全されていると考えられる。	繁殖場所の一部は、水環境の変化の状況等により、生息環境が変化する可能性がある。

5. 植物

(1) 注目すべき種の生育状況（湧水湿地）

① ミズニラ、ムラサキミミカキグサ、ヒナノシャクジョウ、マシカクイの生育状況

1) 調査地点

調査地点は、湧水湿地（貧養地小型植物群落）とした。

2) 調査日

調査日は、表 3-76 に示すとおりであり、注目すべき種のミズニラ、ムラサキミミカキグサ、マシカクイ、ヒナノシャクジョウの 4 種の開花時期及び結実期等に 2 回実施した。

表 3-76 調査日

調査項目 \ 調査時期	夏季	秋季
注目すべき種の生育状況	令和 6 年 7 月 17 日	令和 6 年 9 月 19 日

3) 調査方法

調査方法は、表 3-77 に示すとおりである。

表 3-77 調査方法

調査項目	調査対象	調査方法	
注目すべき種の生育状況	ミズニラ ムラサキミミカキグサ ヒナノシャクジョウ マシカクイ	直接観察法	・ 注目すべき種の指標種の生育状況を確認し、生育個体数または生育面積等を記録した。
		定点観察法	・ 注目すべき種の生育場所の植生変化をモニタリングするため、注目すべき種の生育場所を含む形で定点調査区（大きさ 1m×1m 程度を 3 定点）を設け、表 3-78 に示す定点観測の記録を行った。

表 3-78 定点観察の調査項目

No.	定点観察の調査項目
1	生育する湧水湿地の指標種の個体数もしくは広がり
2	全出現植物の種名及び種ごとの被覆割合（被度）と群がり（群度）の度合い
3	調査区全体の植物平均高及び植被率

【被度】

区 分	摘 要
5	被度が調査区域の 3/4 以上を占めている。個体数は任意。
4	被度が調査区域の 1/2～3/4 を占めている。個体数は任意。
3	被度が調査区域の 1/4～1/2 を占めている。個体数は任意。
2	きわめて個体数が多いか、また少なくとも調査面積の 1/10～1/4 を占めている。
1	個体数が多いが被度は 1/20 以下、あるいは散生するか被度は 1/10 以下。
+	きわめて低い被度 (1/100 以下) で、わずかな個体数。

5 4 3 2 1 +

【群度】

区 分	摘 要
5	ある植物が、調査区内に、カーペット状に一面に生育している。
4	大きな斑紋状。カーペットのあちこちに穴があいているような状態。
3	小群の斑紋状。
2	小群状。
1	単生。

5 3 2 1

4

4) 調査結果及び予測結果との比較

ア) 調査結果

i) 注目すべき種の生育状況

a) 直接観察

調査結果を表 3-79 に示す。

現地調査の結果、調査対象の注目すべき種である、ミズニラ、ムラサキミミカキグサ、ヒナノシャクジョウ、マシカクイの4種全ての生育が確認された。

表 3-79 注目すべき種の調査結果

注目すべき種	時期	調査日	確認状況
ミズニラ	夏季	令和6年7月17日	湧水湿地内の1ヶ所で48個体、湧水湿地上流の沢沿い1ヶ所で9個体を確認した。
	秋季	令和6年9月19日	湧水湿地内の1ヶ所で30個体、湧水湿地上流の沢沿い1ヶ所で10個体を確認した。
ムラサキミミカキグサ	夏季	令和6年7月17日	湧水湿地内の1ヶ所で15個体を確認した。
	秋季	令和6年9月19日	湧水湿地内の1ヶ所で20個体を確認した。
ヒナノシャクジョウ	夏季	令和6年7月17日	湧水湿地内の2ヶ所で19個体、湧水湿地上流の沢沿い16ヶ所で108個体を確認した。
マシカクイ	夏季	令和6年7月17日	湧水湿地内の1ヶ所で40個体を確認した。
	秋季	令和6年9月19日	湧水湿地内の1ヶ所で40個体を確認した。

b) 定点観察

調査結果を表 3-80～表 3-82 に示す。

定点は湧水湿地内に設置し、No.1 地点はマシカクイ、No.2 地点はムラサキミミカキグサ、No.3 地点はミズニラの生育場所を含む形で定点調査区を設定した。

現地調査の結果、No.1 地点はマシカクイ、No.2 地点はムラサキミミカキグサ、No.3 地点はミズニラが継続的に確認された。

表 3-80 No.1 地点の調査結果

夏季		秋季																																																																									
■環境写真																																																																											
																																																																											
■植生図																																																																											
																																																																											
■植生調査票																																																																											
階層構造：草本層 優占種：マシカクイ（注目すべき種） 平均高（m）：0.4 植被率（%）：90 出現種数：11		階層構造：草本層 優占種：ハイチゴザサ 平均高（m）：0.4 植被率（%）：80 出現種数：11																																																																									
<table><tr><th>D・S</th><th>植被率 (%)</th><th>種名（和名）</th></tr><tr><td>2・2</td><td>20</td><td>マシカクイ</td></tr><tr><td>2・2</td><td>15</td><td>ハイチゴザサ</td></tr><tr><td>2・2</td><td>15</td><td>アゼガヤツリ</td></tr><tr><td>2・2</td><td>10</td><td>ヒメジソ</td></tr><tr><td>2・2</td><td>10</td><td>チゴザサ</td></tr><tr><td>2・2</td><td>10</td><td>イボクサ</td></tr><tr><td>1・2</td><td>5</td><td>ミズニラ</td></tr><tr><td>1・1</td><td>5</td><td>イトイヌノヒゲ</td></tr><tr><td>+</td><td>1</td><td>チダケサシ</td></tr><tr><td>+</td><td>1</td><td>アオコウガイゼキショウ</td></tr><tr><td>+</td><td>0.5</td><td>スギ</td></tr></table> (※D・S：被度・群度)		D・S	植被率 (%)	種名（和名）	2・2	20	マシカクイ	2・2	15	ハイチゴザサ	2・2	15	アゼガヤツリ	2・2	10	ヒメジソ	2・2	10	チゴザサ	2・2	10	イボクサ	1・2	5	ミズニラ	1・1	5	イトイヌノヒゲ	+	1	チダケサシ	+	1	アオコウガイゼキショウ	+	0.5	スギ	<table><tr><th>D・S</th><th>植被率 (%)</th><th>種名（和名）</th></tr><tr><td>2・2</td><td>20</td><td>ハイチゴザサ</td></tr><tr><td>2・2</td><td>15</td><td>マシカクイ</td></tr><tr><td>2・2</td><td>15</td><td>アゼガヤツリ</td></tr><tr><td>2・2</td><td>10</td><td>イトイヌノヒゲ</td></tr><tr><td>1・2</td><td>5</td><td>チゴザサ</td></tr><tr><td>1・2</td><td>5</td><td>ヒメジソ</td></tr><tr><td>1・2</td><td>5</td><td>イボクサ</td></tr><tr><td>1・2</td><td>5</td><td>ミズニラ</td></tr><tr><td>+</td><td>1</td><td>チダケサシ</td></tr><tr><td>+</td><td>0.5</td><td>カリマタガヤ</td></tr><tr><td>+</td><td>0.5</td><td>ホタルイ</td></tr></table> (※D・S：被度・群度)		D・S	植被率 (%)	種名（和名）	2・2	20	ハイチゴザサ	2・2	15	マシカクイ	2・2	15	アゼガヤツリ	2・2	10	イトイヌノヒゲ	1・2	5	チゴザサ	1・2	5	ヒメジソ	1・2	5	イボクサ	1・2	5	ミズニラ	+	1	チダケサシ	+	0.5	カリマタガヤ	+	0.5	ホタルイ
D・S	植被率 (%)	種名（和名）																																																																									
2・2	20	マシカクイ																																																																									
2・2	15	ハイチゴザサ																																																																									
2・2	15	アゼガヤツリ																																																																									
2・2	10	ヒメジソ																																																																									
2・2	10	チゴザサ																																																																									
2・2	10	イボクサ																																																																									
1・2	5	ミズニラ																																																																									
1・1	5	イトイヌノヒゲ																																																																									
+	1	チダケサシ																																																																									
+	1	アオコウガイゼキショウ																																																																									
+	0.5	スギ																																																																									
D・S	植被率 (%)	種名（和名）																																																																									
2・2	20	ハイチゴザサ																																																																									
2・2	15	マシカクイ																																																																									
2・2	15	アゼガヤツリ																																																																									
2・2	10	イトイヌノヒゲ																																																																									
1・2	5	チゴザサ																																																																									
1・2	5	ヒメジソ																																																																									
1・2	5	イボクサ																																																																									
1・2	5	ミズニラ																																																																									
+	1	チダケサシ																																																																									
+	0.5	カリマタガヤ																																																																									
+	0.5	ホタルイ																																																																									

表 3-81 No.2 地点の調査結果

夏季

秋季

■ 環境写真

■ 植生図

■ 植生調査票

階層構造：草本層
優占種：トダシバ
平均高（m）：0.5
植被率（％）：90
出現種数：9

D・S	植被率 (%)	種名（和名）
3・3	30	トダシバ
2・2	20	マシカクイ
2・2	10	ヒメジソ
2・2	10	ムラサキミミカキグサ
2・2	10	イトイヌノヒゲ
2・2	10	チゴザサ
+	2	ハイチゴザサ
+	1	サワヒヨドリ
+	0.5	コケオトギリ

（※D・S：被度・群度）

階層構造：草本層
優占種：トダシバ
平均高（m）：0.7
植被率（％）：90
出現種数：16

D・S	植被率 (%)	種名（和名）
2・2	20	トダシバ
2・2	15	コイヌノハナヒゲ
2・2	10	イトイヌノヒゲ
2・2	10	マシカクイ
2・2	10	チゴザサ
2・2	10	ヒメジソ
1・2	5	ムラサキミミカキグサ
1・2	5	ヤマイ
+	3	アゼガヤツリ
+	2	ハイチゴザサ
+	2	ホタルイ
+	1	ハイスメリグサ
+	0.5	ツボクサ
+	0.5	コケオトギリ
+	0.5	サワヒヨドリ
+	0.5	カリマタガヤ

（※D・S：被度・群度）

表 3-82 No.3 地点の調査結果

夏季

秋季

■環境写真

■植生図

W:開放水面

W:開放水面

■植生調査票

階層構造：草本層
 優占種：ハイチゴザサ
 平均高（m）：0.6
 植被率（％）：80
 出現種数：11

D・S	植被率 (%)	種名（和名）
3・3	40	ハイチゴザサ
2・2	20	ミズニラ
2・2	10	マシカクイ
1・2	5	コイヌノハナヒゲ
1・1	2	シケシダ
+	2	ヒメジソ
+	1	チダケサシ
+	1	イトイヌノヒゲ
+	0.5	コケオトギリ
+	0.5	クマヤナギ
+	0.5	イボクサ

(※D・S：被度・群度)

階層構造：草本層
 優占種：ハイチゴザサ
 平均高（m）：0.6
 植被率（％）：80
 出現種数：13

D・S	植被率 (%)	種名（和名）
3・3	30	ハイチゴザサ
2・2	20	ミズニラ
2・2	10	イトイヌノヒゲ
1・2	5	コイヌノハナヒゲ
1・2	5	ヒメジソ
+	3	カリマタガヤ
+	3	マシカクイ
+	3	アゼガヤツリ
+	2	シケシダ
+	1	チダケサシ
+	1	スギ
+	0.5	クマヤナギ
+	0.5	ハシカグサ

(※D・S：被度・群度)

ii) 注目すべき種の経年の生育状況

a) 直接観察

過年度調査から継続して、調査対象の注目すべき種である、ミズニラ、ムラサキミミカキグサ、ヒナノシャクジョウ、マシカクイの4種全ての生育が確認された。

b) 定点観察

過年度調査から継続して、湧水湿地に設置した3定点で注目すべき種が確認された。

No.1 地点はマシカクイ、No.2 地点はムラサキミミカキグサ、No.3 地点はミズニラの生育が継続して確認された。

5) 予測結果との比較

環境影響評価書における予測結果と事後調査結果について比較を行った。

比較結果は、表 3-83 に示すとおりである。

表 3-83 予測結果との比較

予測項目	事後調査結果	予測結果
ミズニラ	事後調査において、生育が確認されたことから、生育環境は保全されていると考えられる。	生育場所は、施設の存在による水環境の変化により、生育場所の環境が変化する可能性がある。
ムラサキミミカキグサ		生育場所は、施設の存在による水環境の変化により、生育場所の環境が変化する可能性がある。
ヒナノシャクジョウ		生育場所は、施設の存在による水環境の変化により、生育場所の環境が変化する可能性がある。
マシカクイ		生育場所は、施設の存在による水環境の変化により、生育場所の環境が変化する可能性がある。

(2) 移植した注目すべき植物の生育状況（移植地）

① ホナガタツナミソウ、エビネ、タチキランソウ、ウスギムヨウランの生育状況

1) 調査地点

調査地点は、対象事業実施区域内の移植地とした。

2) 調査日

調査日は、表 3-84 に示すとおりであり、移植した注目すべき種のホナガタツナミソウ、エビネ、タチキランソウ、ウスギムヨウランの4種の開花時期（4～6月）に3回実施した。

表 3-84 調査日

調査項目	調査対象	開花時期
移植した注目すべき植物の生育状況	ホナガタツナミソウ	令和6年6月24日
	エビネ	令和6年5月21日
	タチキランソウ	令和6年4月21日
	ウスギムヨウラン	令和6年5月21日

3) 調査方法

調査方法は、表 3-85 に示すとおりである。

表 3-85 調査方法

調査項目	調査対象	調査方法	
移植した注目すべき植物の生育状況	ホナガタツナミソウ エビネ タチキランソウ ウスギムヨウラン	直接観察法	移植個体の生育個体数や活着状況を記録した。

4) 調査結果及び予測結果との比較

ア) 調査結果

i) 移植した注目すべき植物の生育状況

a) ホナガタツナミソウ

移植したホナガタツナミソウの調査結果は、表 3-86 に示すとおりである。

表 3-86 ホナガタツナミソウの生育状況の確認

生育個体数の推移

- ・ 移植直後に 160 株確認されたのに対して、2024 年度は 168 株が確認され、移植したホナガタツナミソウは活着していると考えられる。
- ・ 移植から 2023 年度までは個体数が増加したが、2024 年度は個体数が大きく減少した。

確認数の経年変化

生育の状況
(2024 年 6 月 24 日)

調査結果詳細

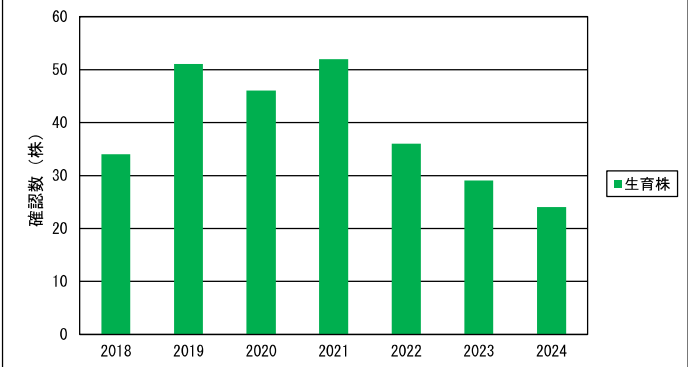
移植直後のモニタリング	確認時期	確認状況	
		確認場所	確認数
160株の移植個体の生育を確認（2018年度）	2019年 6 月 5 日	移植枠内	122 株
		移植枠外	0 株
	2020年 6 月 1 日	移植枠内	185 株
		移植枠外	42 株
	2021年 6 月 3 日	移植枠内	180 株
		移植枠外	83 株
	2022年 6 月 2 日	移植枠内	207 株
		移植枠外	102 株
2023年 6 月 19 日	移植枠内	199 株	
	移植枠外	148 株	
2024年 6 月 24 日	-	168 株	

注) 2024 年度調査において、移植枠の境界が不明瞭になっていたため、枠の内外を分けず個体数を集計した。

b) エビネ

移植したエビネの調査結果は、表 3-87 に示すとおりである。

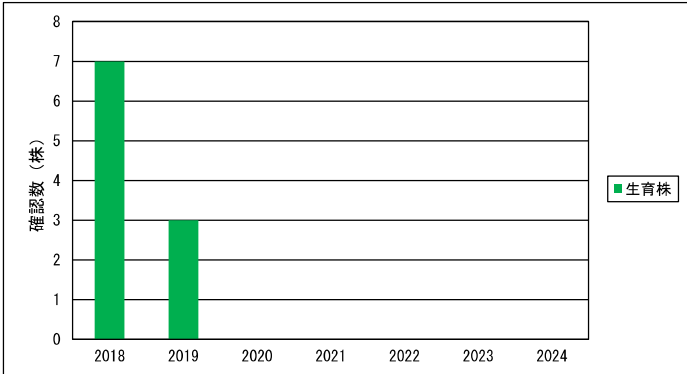
表 3-87 エビネの生育状況の確認

生育個体数の推移	・移植直後に 34 株確認されたのに対して、2024 年度は 24 株確認された。一時的に生育個体数は増加したものの、「土砂流出による根の露出」等の要因により 2021 年度をピークに個体数が減少している。 ・6 年間継続して確認されており、周辺にも新たなエビネが確認されていることから、移植したエビネは活着していると考えられる。	
確認数の経年変化		生育の状況 (2024 年 5 月 21 日)
		
調査結果詳細		
34 株の移植個体の生育を確認(2018 年度)	移植直後のモニタリング	確認時期
		2019 年 5 月 17 日
		51 株
		2020 年 5 月 14 日
		46 株
		2021 年 5 月 19 日
		52 株
		2022 年 5 月 12 日
		36 株
		2023 年 5 月 16 日
		29 株
		2024 年 5 月 21 日
		24 株

c) タチキランソウ

移植したタチキランソウの調査結果は、表 3-88 に示すとおりである。

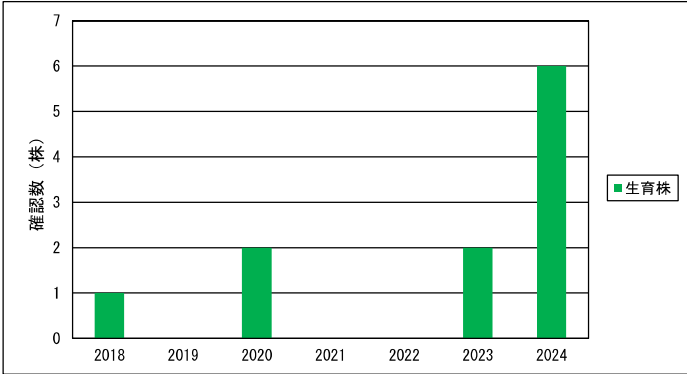
表 3-88 タチキランソウの生育状況の確認

生育個体数の推移	・移植直後に 7 株確認されたのに対して、2024 年度は確認されなかった。 ・2020 年度時点で移植個体が確認されなかったため、日当たりが良く、礫等の粒子が粗い環境に移植場所の土壌を掘り取り、再移植を行ったものの、次年度以降も確認されなかった。																	
確認数の経年変化		生育の状況 (2024 年 4 月 21 日)																
 <table><caption>確認数の経年変化</caption><thead><tr><th>年</th><th>確認数 (株)</th></tr></thead><tbody><tr><td>2018</td><td>7</td></tr><tr><td>2019</td><td>3</td></tr><tr><td>2020</td><td>0</td></tr><tr><td>2021</td><td>0</td></tr><tr><td>2022</td><td>0</td></tr><tr><td>2023</td><td>0</td></tr><tr><td>2024</td><td>0</td></tr></tbody></table>		年	確認数 (株)	2018	7	2019	3	2020	0	2021	0	2022	0	2023	0	2024	0	確認なし
年	確認数 (株)																	
2018	7																	
2019	3																	
2020	0																	
2021	0																	
2022	0																	
2023	0																	
2024	0																	
調査結果詳細																		
移植直後のモニタリング	確認時期	確認数																
7 株の移植個体の生育を確認 (2018 年度)	2019 年 4 月 23 日	3 株																
	2020 年 4 月 20 日	0 株																
	2021 年 4 月 12 日	0 株																
	2022 年 4 月 12 日	0 株																
	2023 年 4 月 13 日	0 株																
	2024 年 4 月 21 日	0 株																

d) ウスギムヨウラン

移植したウスギムヨウランの調査結果は、表 3-89 に示すとおりである。

表 3-89 ウスギムヨウランの生育状況の確認

生育個体数の推移	・ 移植直後に 1 株確認されたのに対して、2024 年度は 6 株確認された。一時期は、未確認の年があるものの、定期的に確認されるためウスギムヨウランは活着していると考えられる。	
確認数の経年変化		生育の状況 (2024 年 5 月 21 日)
		
調査結果詳細		
移植直後のモニタリング	確認時期	確認数
1 株の移植個体の生育を確認 (2018 年度)	2019 年 6 月 5 日	0 株
	2020 年 5 月 26 日	2 株
	2021 年 6 月 3 日	0 株
	2022 年 6 月 2 日	0 株
	2023 年 5 月 16 日	2 株
	2024 年 5 月 21 日	6 株

ii) 移植した注目すべき植物の経年の生育状況

過年度調査から継続して、移植した注目すべき種であるホナガタツナミソウ、エビネ、ウスギムヨウランの 3 種の生育が確認された。一方で、タチキランソウについては確認できなかった。

5) 予測結果との比較

環境影響評価書における予測結果と事後調査結果について比較を行った。

比較結果は、表 3-90 に示すとおりである。

表 3-90 予測結果との比較

予測項目	事後調査結果	予測結果
ホナガタツナミソウ	活着状況は、概ね良好であった。	対象事業実施区域内の主な生育場所の一部が消失・縮小する可能性がある。
エビネ		対象事業実施区域内の生育場所の一部が消失・縮小する可能性がある。
タチキランソウ	開花時期において個体を確認することができなかった。	対象事業実施区域内の生育場所の一部が消失した恐れがある。
ウスギムヨウラン	活着状況は、概ね良好であった。	対象事業実施区域内の主な生育場所の一部が消失・縮小する可能性がある。

6. 生態系

(1) 希少猛禽類（主にクマタカ）

① 調査項目

環境影響評価実施時に、対象事業実施区域から約 800m 離れた場所で繁殖が確認されたクマタカ（青谷ペア）を主な調査対象とした。

また、その他希少猛禽類についても、飛翔が確認された場合は記録を行い、対象事業実施区域の端部から 1km 以内における繁殖状況の確認に努めた。

その他希少猛禽類の選定基準は、表 3-91 に示すとおりとした。

表 3-91 希少猛禽類の選定基準

No.	法令及び文献名	基準となる区分
①	文化財保護法 （昭和 25 年、法律第 214 号）	特天：特別天然記念物 天：天然記念物
②	絶滅のおそれのある野生動植物の種の 保存に関する法律 （平成 4 年、法律第 75 号）	国内：国内希少野生動植物種 国際：国際希少野生動植物種
③	静岡県文化財保護条例 （昭和 36 年、静岡県条例第 23 号）	県天：県指定天然記念物
④	静岡県希少野生動植物種保護条例 （平成 22 年、静岡県条例第 37 号）	指定：指定希少野生動植物
⑤	浜松市文化財保護条例 （昭和 52 年、浜松市条例第 28 号）	市天：市指定天然記念物
⑥	環境省レッドリスト 2020 （令和 2 年、環境省）	EX：絶滅 EW：野生絶滅 CR：絶滅危惧ⅠA 類 EN：絶滅危惧ⅠB 類 VU：絶滅危惧Ⅱ類 NT：準絶滅危惧 DD：情報不足 LP：絶滅のおそれのある地域個体群
⑦	環境省レッドリスト 2015 （平成 27 年、環境省）	
⑧	静岡県版レッドリスト 2020 （令和 2 年、静岡県）	EX：絶滅 EW：野生絶滅 CR：絶滅危惧ⅠA 類 EN：絶滅危惧ⅠB 類 VU：絶滅危惧Ⅱ類 NT：準絶滅危惧 DD：情報不足 LP：絶滅のおそれのある地域個体群 N-Ⅰ：要注目種（現状不明） N-Ⅱ：要注目種（分布上注目種等） N-Ⅲ：要注目種（部会注目種）
⑨	まもりたい静岡県の野生生物 2019 ー静岡県レッドデータブックー （動物編） （平成 31 年、静岡県）	

② 調査範囲及び調査地点

調査範囲及び調査地点を図 3-15 に示す。

調査範囲は対象事業実施区域及びその端部から約 1.0km の範囲とし、調査地点は調査範囲内の地点から 3～4 地点を適宜選定し、調査を実施した。

③ 調査期間等

調査期間及び調査日は、表 3-92 に示すとおりとした。

表 3-92 調査実施日

項目	調査時期		調査日	使用定点等	備考		
	年	月					
行動確認調査	令和 6 年	2 月	2 月 1 日	C13、C14、C22、N5	-		
			2 月 2 日				
		3 月	3 月 7 日			C13、C14、N1、N5	
			3 月 8 日				
		4 月	4 月 4 日			移動定点	補足調査
			4 月 5 日				
		5 月	5 月 27 日	C13、C14、C22、N5			
			5 月 28 日				
			5 月 29 日				
		6 月	6 月 7 日	C13、C14、C22、N5	-		
			6 月 24 日				
			6 月 25 日				
		7 月	7 月 25 日				
			7 月 26 日				
		9 月	9 月 4 日			C13、C14、C22、N1	
			9 月 5 日				
	令和 7 年	2 月	2 月 6 日	C13、C14、C22、N1			
			2 月 7 日				
3 月		3 月 6 日	C13、C14、C22、N1				
		3 月 7 日					
営巣地調査	令和 6 年	11 月	11 月 15 日	-	-		

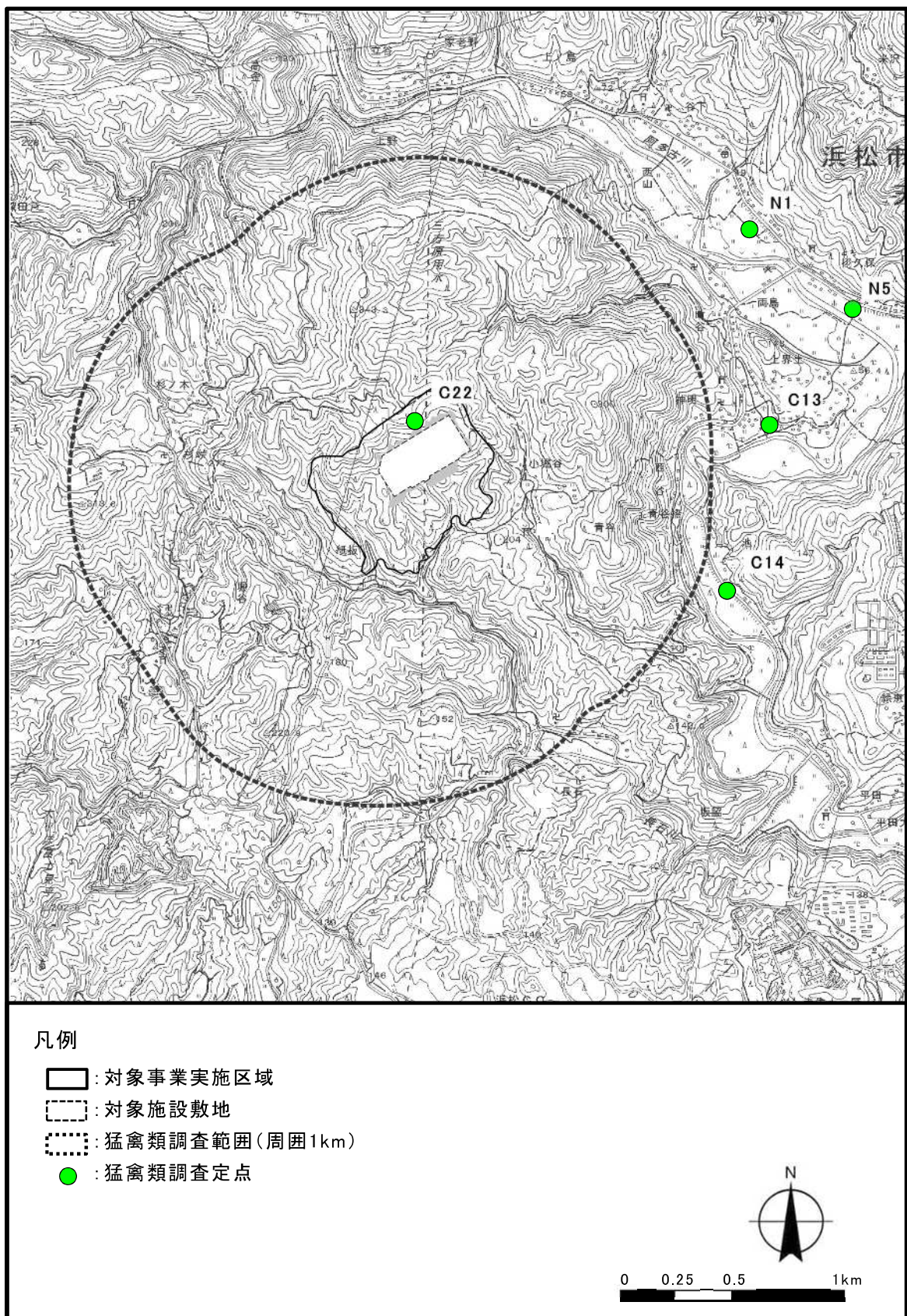


図 3-15 調査範囲及び調査地点

④ 調査方法

調査方法は、表 3-93 に示すとおりとした。

表 3-93 調査項目及び調査方法

項目	調査方法	
行動確認調査	定点観察法	8～10 倍程度の双眼鏡及び 15～60 倍程度の単眼鏡（フィールドスコープ）を用い、種名、雌雄別、成鳥幼鳥別、出現個体数及び飛翔経路等を記録した。また、定点間等で無線機により交信し、観察個体を可能な限り連続追跡することに努めた。
営巣地調査	林内踏査	2 名体制で林縁や林内を踏査し、繁殖痕跡や営巣場所（営巣木）を探索した。双眼鏡やカメラで観察を行い、GPS で位置を記録した。 なお、繁殖に影響が及ぶことが無いように調査時期、調査時間等に留意した。

⑤ 調査結果及び予測結果との比較

1) 調査結果

ア) 令和6年繁殖期

i) 希少猛禽類の確認状況

希少猛禽類の確認状況は表 3-94 に、確認例数は表 3-95 に示すとおりである。

現地調査の結果、1 目 2 科 6 種の希少猛禽類が確認された。

確認された希少猛禽類の確認例数は、クマタカが最も多く、次いでハチクマ、サシバが多かった。

表 3-94 希少猛禽類確認状況

No.	目名	科名	種名	希少猛禽類の選定基準								
				①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
1	タカ	ミサゴ	ミサゴ						NT	NT	N-Ⅲ	N-Ⅲ
2		タカ	ハチクマ						NT	NT	VU	VU
3			ハイタカ						NT	NT	VU	VU
4			オオタカ						NT	NT	NT	VU
5			サシバ						VU	VU	VU	VU
6			クマタカ		国内				EN	EN	VU	VU
合計	1 目	2 科	6 種	0 種	2 種	0 種	0 種	0 種	6 種	6 種	6 種	6 種

注) 種名等の分類並びに配列は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（令和 6 年度版生物リスト）」（国土交通省 2024. 10. 16 更新版）に原則として準じた。

表 3-95 希少猛禽類確認例数

No.	目名	科名	種名	行動確認調査（令和6年繁殖期）							合計
				2月	3月	4月	5月	6月	7月	9月	
1	タカ	ミサゴ	ミサゴ		1			1			2
2		タカ	ハチクマ					2	6	1	9
3			ハイタカ	3	3	2					8
4			オオタカ	1					1	1	3
5			サシバ			2		6		1	9
6			クマタカ	9	11	4	11	13	10	11	69
合計	1 目	2 科	6 種	13	15	8	11	22	17	14	100

ii) 希少猛禽類の繁殖状況

対象事業実施区域において希少猛禽類の繁殖は確認されなかった。

イ) クマタカ（青谷ペア）の経年の繁殖状況

クマタカ（青谷ペア）は、これまでに環境影響評価の現地調査において、対象事業実施区域及びその端部から約 1.0km 範囲で繁殖が確認された。

事後調査においては、表 3-96 に示すとおり、平成 30 年、令和元年、令和 3 年、令和 5 年に繁殖が確認された。

なお、平成 30 年は環境影響評価の現地調査と同じ巣で繁殖に成功したが、令和元年以降は、別の巣（環境影響評価の現地調査で発見した巣の近接地）で繁殖に成功した。

表 3-96 クマタカ（青谷ペア）の経年の繁殖状況

繁殖期		繁殖状況		
		繁殖の成否	繁殖状況	巣立ち時期
環境影響評価	平成 27 年	×	－	－
	平成 28 年	○	1 個体の巣立ちを確認	平成 28 年 8 月中旬
	平成 29 年	×	－	－
事後調査	平成 30 年	○	1 個体の巣立ちを確認	平成 30 年 7 月中旬
	令和元年	○	1 個体の巣立ちを確認	令和元年 6 月下旬
	令和 2 年	×	－	－
	令和 3 年	○	1 個体の巣立ちを確認	令和 3 年 8 月上旬～中旬
	令和 4 年	×	－	－
	令和 5 年	○	1 個体の巣立ちを確認	令和 5 年 7 月中旬
	令和 6 年	×	－	－

2) 予測結果との比較

環境影響評価書における予測結果と事後調査結果について比較を行った。

比較結果は、表 3-97 に示すとおりである。

表 3-97 予測結果との比較

予測項目	事後調査結果	予測結果
クマタカ （青谷ペア）	平成30年、令和元年、令和3年、令和5年と継続して繁殖が確認されていることから、クマタカ（青谷ペア）の繁殖環境及び生息環境は保全されていると考えられる。	施設建設時、稼働時においても、クマタカの行動圏に変化は認められず繁殖活動も継続されているものと判断される。

(2) 指標種の生息・生育状況（湧水湿地）

① 湧水湿地の植物

1) 調査地点

調査地点は、湧水湿地（貧養地小型植物群落）とした。

2) 調査日

調査日は、表 3-98 に示すとおりであり、植物の開花時期、結実期等を踏まえ 2 回実施した。

表 3-98 調査日

調査項目	調査時期	
	夏季	秋季
湧水湿地の植生	令和 6 年 7 月 17 日	令和 6 年 9 月 19 日

3) 調査方法

調査方法は、表 3-99 に示すとおりである。

表 3-99 調査方法

調査項目	調査方法
湧水湿地の植生	・踏査等により、植生を低木や藪地の分布に着目して相観区分し、地表に陽が当たる場所、表流水が認められる場所を図示した相観植生図を作成した。

4) 調査結果及び予測結果との比較

ア) 調査結果

i) 植生の変化

調査結果は、図 3-16 及び表 3-100 に示すとおりである。

湧水湿地の相観植生は、ハイチゴザサ群落、ミズニラ群落、マシカクイ群落、低木群落に区分された。

湿った湿地環境には、ハイチゴザサ群落、ミズニラ群落、マシカクイ群落がみられ、土砂が堆積した場所には、低木群落がみられた。

ハイチゴザサ群落は、泥が堆積した湿地状の環境が形成される場所もあるが、砂礫が堆積し、乾燥した自然裸地に遷移した場所もみられた。

湧水湿地の注目すべき種は、ムラサキミミカグサ及びマシカクイはマシカクイ群落が、ミズニラはミズニラ群落が主な生育場所となっていた。

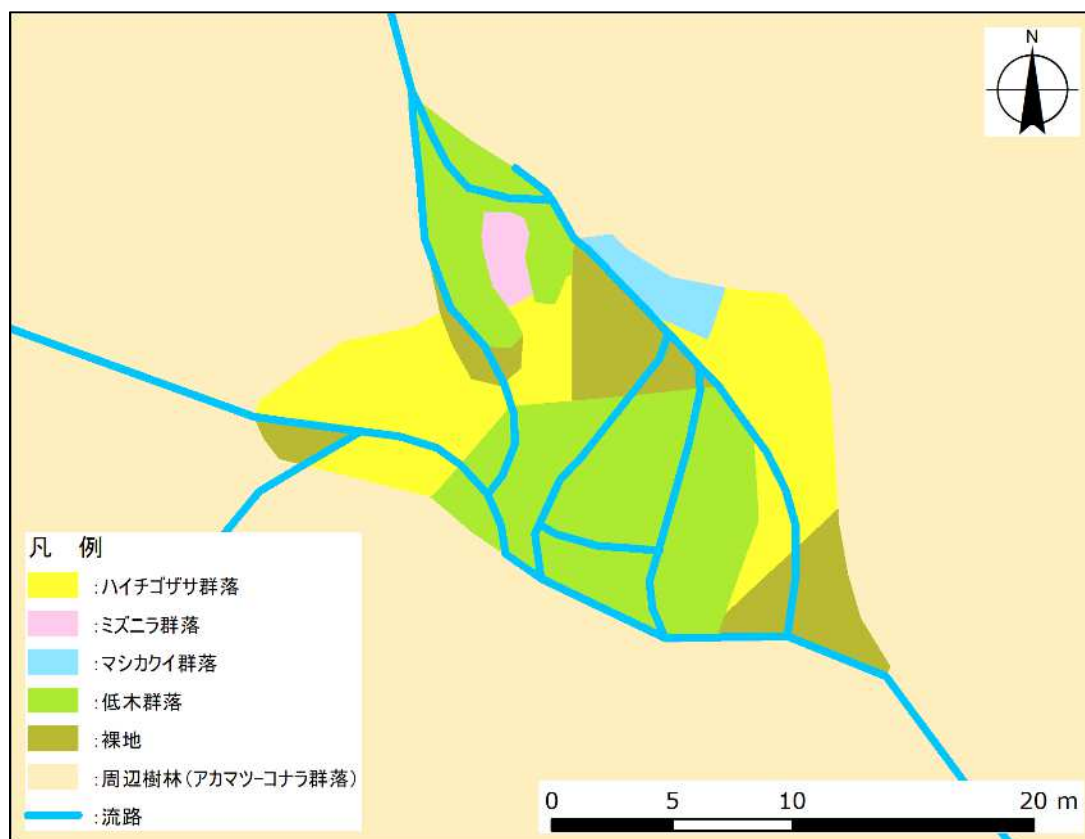


図 3-16 湧水湿地の相観植生図

表 3-100 各群落の概況

ハイチゴザサ群落	ミズニラ群落
	
・泥や砂礫が堆積し、泥が堆積した場所には、水たまりが出来るなど、湿った湿地環境を形成している。 ・砂礫が堆積した場所は、乾燥した自然裸地に遷移が進んでいる。 ・一部、周辺樹林の緑陰となる場所があるが、上空が開けた明るい環境が多い。	・泥や砂礫が堆積し、水たまりが出来るなど、湿地環境を形成している。 ・ミズニラやハイチゴザサ等の草本類が生育している。 ・低木群落に隣接しているため、緑陰となっている。
マシカクイ群落	低木群落
	
・砂礫が堆積し、水たまりが出来るなど、湿地環境を形成している。 ・ムラサキミミカキグサ及びマシカクイが生育する環境である。	・土砂が堆積し、アカマツやスギ等の樹木（低木）が生育している。 ・湿地内の流路はこの地形に沿って流下している。

ii) 植生の経年変化

過年度調査から、大きな変化は確認されなかった。

5) 予測結果との比較

環境影響評価書における予測結果と事後調査結果について比較を行った。

比較結果は、表 3-101 に示すとおりである。

表 3-101 予測結果との比較

予測項目	事後調査結果	予測結果
湧水湿地の植生	ハイチゴザサ群落、ミズニラ群落、マシカクイ群落等の湿地環境が確認されたことから、湧水湿地の環境は保全されていると考えられる。	施設の存在に伴う水環境の変化により、湿地環境の乾燥化が生じる可能性がある。